

# 「目的語残存受身文」における目的語残存の条件について

— 中国語との対照という視点から —

于 康

## 1. 問題提起

受身文<sup>1</sup>では、能動文の目的語<sup>2</sup>が主語<sup>3</sup>に昇格し、能動文の主語が「ニ格」や「テ格」に降格されることが受身文の主な構文的条件とされている<sup>4</sup>。しかし、日本語の受身文には、例(1)のように目的語が昇格せず、そのまま元の位置に残るという用法も存在する。

- (1) 此黒い猫は往々にして暗い処に居る時に尾を踏まれたり足を踏まれたりするものである、(『YUKANGコーパス』猫と色の嗜好・石田孫太郎)<sup>5</sup>

能動文の目的語が主語に昇格しなければならないということが受身文の構文条件であるとすれば、例(1)のような受身文は、明らかにこの条件から逸脱している。このような用法は日本語だけではなく、例えば、(2)のように、中国語でも観察される。

- (2) 你 被 小偷 偷 过 手机 吗?  
あなた 受身 泥棒 盗む ~たことがある 携帯 か  
あなたは、泥棒に携帯を盗まれたことがある?<sup>6</sup>

例(1)のような受身文は、日本語学の研究では「持ち主の受身文」と呼ばれている。能動文の目的語の名詞的修飾成分(属格)は、受身文の主語に昇格され、かつ目的語との間に何らかの意味関係が観察されるとされている。例えば、

- (3) a. 油屋の木村勘兵衛という人は、泥棒に入られて、この洋服をとられたんですか?  
(Y・石中先生行状記・石坂洋次郎)  
b. =泥棒は木村勘兵衛の洋服をとった。  
(4) a. 女性従業員が椅子でクマに立ち向かおうとしたが、逆に右手をかまれた。  
(Y・毎日新聞2009年)  
b. =クマは女性従業員の右手をかんだ。  
(5) a. 私は父を殺された。(Y・毎日新聞1995年)  
b. =(だれかが)私の父を殺した。

主語と目的語との意味関係は、(3 a.) が所有の関係、(4 a.) が全体と部分の関係、(5 a.) が親族の関係である。一方、受身文(2)は、中国語学の研究では“保留宾语结构(目的語残存構文)”(例えば徐杰2009、潘海华・韩景泉2008等)と呼ばれている<sup>7</sup>。日本語と同様、主語にたつ成分も、いずれも能動文の目的語の名詞的修飾成分(属格)であり、主語と目

的語との間には、次の用例のように、所有関係、全体と部分の関係、親族の関係を含意するものが容易に観察される。

- (6) a. 你被小偷偷过手机吗? (再掲)  
b. =小偷偷过你的手机吗? / 泥棒はあなたの携帯を盗んだことがある?
- (7) a. 苹果 被 削 了 皮。  
リンゴ 受身 剥く た 皮  
リンゴは、皮を剥かれた。  
b. = (X) 削了苹果的皮。 / (Xは) リンゴの皮を剥いた。
- (8) a. 张三 被 杀 了 父亲。  
張三 受身 殺す た 父  
張三さんは、父を殺された。  
b. = (X) 杀了张三的父亲。 / (Xは) 張三さんのお父さんを殺した。

(6と7の用例は徐杰1999、p.17)

日本語における主語と目的語との意味関係について、鈴木(1972)は、「所有者と所有物の関係」、「作成者と作成物との関係」、そして「身体部位」と3分類しているのに対し、仁田(1992、p.325)は、ガ格がもとの動詞の表す動きから間接的な働きかけや作用を被っているか、または、直接的な働きかけや作用を被っているかを基準に、鈴木(1972)と後の高橋(1977、1988)と異なる立場を取り、目的語残存受身文を「第三者の受身」と「持ち主の受身」にまず2分類し、「持ち主の受身」を更に「接触場所の持ち主」、「部分・側面の持ち主」、「状況のヲ格を持つ」と3分類している(仁田1992、p.347)<sup>8</sup>。主語が表すものと目的語が表すものとの関係が分離可能<sup>9</sup>かどうかということを条件とするかどうか分類の相違の根拠のようである。

しかし、分離が可能か否かという条件は、意味解釈のレベルのもので、統語論のレベルのものではないので、解釈は説明者によって揺れがある。従って、本稿は、構文的条件に着目し、またそれを根拠として、能動文の目的語が受身文において目的語の位置に残るとなれば、主語と目的語との意味関係がどうであれ、いずれも「目的語残存受身文」と見なすことにする。

さて、身体部位については、「全体と部分」の関係とするか、「所有と所属」の関係とするかにおいて、分類の相違が見られるものの、主語と目的語との間に何らかの意味関係が存在することには異議がないようである。ところが、次のような用例もよく見受けられる。

- (9) 一川氏は1日の国会で、米軍普天間飛行場移設問題の発端となった1995年の米海兵隊員による少女暴行事件を質問され、「正確な中身は詳細には知らない」と答弁した。(毎日新聞2011年12月3日)  
# 一川氏の米軍普天間飛行場移設問題の発端となった1995年の米海兵隊員による少女暴行事件

- (10) この後、北京で2つ目の金メダルを手にした内柴容疑者は、故郷・熊本県の九州看護福祉大から声をかけられる。念願の指導者になった内柴容疑者は、選手時代同様に実績を積み上げていくことになる。(産経新聞12月11日)

#### ≠内柴容疑者の声

例(9)における「一川氏」と「少女暴行事件」、(10)における「内柴容疑者」と「声」との間には、「所有と所属」、「全体と部分」、「親族」といった意味関係が見られず、主語はいずれも能動文の目的語の属格すなわち名詞的修飾成分から昇格されてきたものではない。

目的語残存受身文は、そのすべてにおいて、主語と目的語との間に必ずしも何らかの意味関係が存在するものではない以上、なぜ目的語が残存されるかが課題になる。しかし、この問題については、課題がまだ沢山残されているのが実情である。そこで、本稿は、以上の現状を踏まえ、二項動詞の目的語残存受身文を中心に、構文的制約から目的語残存の条件を明らかにしてみたい。

## 2. 目的語残存受身文のカテゴリー

構文形式から見れば、「NP<sub>1</sub>は(NP<sub>3</sub>に／から)NP<sub>2</sub>をVれる／られる」は、目的語残存受身文の最も典型的な構文である。NP<sub>1</sub>とNP<sub>2</sub>との意味関係について、これまでの先行研究でも、複数の意味カテゴリーが存在することは前項においてすでに確認済みである。

本稿は、NP<sub>1</sub>とNP<sub>2</sub>との意味関係の有無から、目的語残存受身文を、I型目的語残存受身文とII型目的語残存受身文に分ける。I型目的語残存受身文とは、NP<sub>1</sub>とNP<sub>2</sub>との間に所有と所属、全体と部分、親族などのように、何らかのつながりのある意味関係があるものを指し、II型目的語残存受身文とは、NP<sub>1</sub>とNP<sub>2</sub>との間につながりのある意味関係が見られないものを指す。図式で示すと図1のようになる。

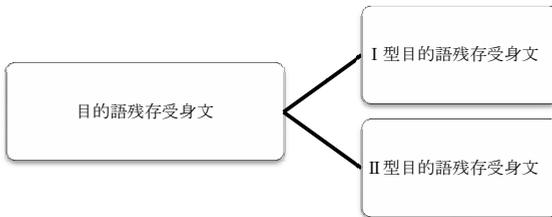


図1 目的語残存受身文の分類

## 3. 二項動詞目的語残存受身文

二項動詞とは、2つのNPの共起を求め、構文要素としてのNPが1つでも足りなければ、文が不完全のものになるかあるいは意味が充足しないことになるかといった動詞のことで

ある。従って、二項動詞と言っても、殆どの場合は、他動詞のことを意味する。

二項動詞目的語残存受身文において、Ⅰ型目的語残存受身文とⅡ型目的語残存受身文の使用例がコーパスから容易に観察される。以下、それぞれの使用例を挙げた上で、目的語残存の条件を考えてみたい。

### 3.1 二項動詞におけるⅠ型目的語残存受身文

#### 3.1.1 コロケーションの制約と目的語残存の条件

日本語の二項動詞目的語残存受身文において、Ⅰ型目的語残存受身文の使用は顕著である。例えば、

- (11) 博士はお化け鞆を怪漢のために奪われたのではあるまいか。(Y・鞆らしくない鞆・海野十三)  
=博士のお化け鞆
- (12) こうして、母は娘を殺された恨みと悲しみとに悶えながら、(Y・ある抗議書・菊池寛)  
=母の娘
- (13) 日記や随筆と変らぬ新人の作品が、その素直さを買われて小説として文壇に通用し、(Y・可能性の文学・織田作之助)  
=新人の作品の素直さ
- (14) はる子は心を打たれ、やや暫くその紙面を見つめていた。(Y・沈丁花・宮本百合子)  
=はる子の心
- (15) 松蔵は頭を打たれて死んだと云うのです。(Y・半七捕物帳地蔵は踊る・岡本綺堂)  
=松蔵の頭

目的語と動詞との統語的關係には、用例(11)~(13)のように、コロケーションでないものもあれば、用例(14)と(15)のように、コロケーションであるものもある。

コロケーションとは、2つ以上の単語が慣用的に固く結びついたものことである。コロケーションのフレーズは、その構成成分がそれほど自由に動くことができないので、統語的にも意味的にも一定の制約を受けることになる。

用例の(14)と(15)を踏まえ、「心を打つ」と「頭を打つ」を対象に、『青空文庫』2006年12月17日までの4,902作品を検索し、能動文の目的語の「心」と「頭」が受身文に用いられる際に、主語と目的語のどちらになりやすいかを調べてみた。その結果は表1の通りである。

	NPを打たれ (て／る／た)	NPが(の)打たれ (て／る／た)	合計
心を打つ	42 (95%)	2 (5%)	44
頭を打つ	11 (85%)	2 (15%)	13

表1 受身文における「心」と「頭」の位置

表1からもうかがえるように、目的語残存受身文において、目的語と動詞がコロケーションの場合は、目的語が殆ど残存することになる。それに対し、目的語と動詞がコロケーションでない場合は、主語に昇格することもあれば、残存することもある。つまり、受身文において、主語と目的語との意味関係がどうであれ、目的語と動詞がコロケーションであるならば、目的語は殆ど「を」で表記され、そのまま目的語の位置に残存するということである。

さて、中国語の場合はどうであろうか。まず用例を見てみたい。

- (16) 一个美国青年在新加坡的大街上乱涂乱抹，结果被打了屁股。(北京大学CCL)<sup>10</sup>／あるアメリカ人の若者はお尻を叩かれた。  
＝一个美国青年的屁股／あるアメリカ人の若者のお尻
- (17) 方孝孺为建文帝尽忠、被明成祖砍了头、并不可怜。(北京大学CCL)／方孝孺は明成祖に頭を切り落とされた。  
＝方孝孺的头／方孝孺の頭
- (18) 她被树枝挂破了衣服。(陸俊明2006)／彼女は、枝によって服を破られた。  
＝她的衣服／彼女の服
- (19) 他甚至没有姓、有一次自称与赵太爷是 본家、竟被打了几个嘴巴。(北京大学CCL)／かれは頬をうたれた。  
＝他的嘴巴／かれの頬
- (20) 他被范大头的小媳迷住心窍。(白鹿原)／かれは範大頭の嫁に心を迷わされた。  
＝他的心窍／かれの心

以上の用例によって示されているように、中国語の二項動詞のI型目的語残存受身文も日本語と同様、用例(19)と(20)のように、目的語と動詞がコロケーションの場合と、用例(16)～(18)のように、そうでない場合がある。しかし、コロケーションとして用いられるとしても、コロケーションにおける目的語NPが受身文の主語にたつか目的語に残存するかによって、目的語が表す意味がかなり異なることがある。例えば、“打屁股／尻を叩く”は、身体部位の意味と「怒られる」の意味の両方に解釈できる多義的なものである。

- (21) 当心被经理打屁股！

／①気をつけてね。社長にお尻を叩かれないように。

／②気をつけてね。社長に怒られないように。

- (22) 他的屁股被经理打了一下。／かれのお尻は社長に叩かれた。

“屁股／尻”は、目的語の位置に残る場合、用例(21)のように、身体部位の意味と「怒られる」の意味を合わせ持つ。これに対して、“屁股／尻”が主語に昇格される場合、多義性が解消され、身体部位の意味しか表さない。

要するに、I型目的語残存受身文における目的語残存の構文的条件の一つとして、目的語と動詞がコロケーションであるかどうかが挙げられる。日本語と中国語を問わず、目的

語と動詞がコロケーションの場合は、目的語が昇格されず、そのまま目的語の位置に残りやすいのである。

### 3.1.2 受影者主語とテーマ主語

さて、これまでの先行説は、コロケーションでない用法を中心にその研究が進められてきた。その中には、主語が表すものが、VPが表す動作の直接の受け手になるかどうかということを条件に分類したのもあれば、主語と残存目的語とが意味的に分離可能かどうかということも条件に分類したのもある。

用例(12)の「母は娘を殺された」において、「母」は「殺された」わけではないので、動作の受け手ではなく、「娘」とは意味的に分離可能の関係のように見えるので、持ち主受身文ではないとする説もある。しかし、それにしても、「母」と「娘」とが親族の関係にあり、なおかつ「母」は、「娘が殺された」事件の受影者でもあることから、両者は意味的につながりがあるとすることができる。「母は娘を殺された」のような受身文がどのように分類されるべきかというよりは、最も重要なのは昇格されるべき目的語の「娘」がなぜ昇格されないのかということであろう。

能動文の目的語における属格でマークされる名詞と属格で修飾される名詞との意味関係は、所有と所属にせよ、全体と部分にせよ、親族にせよ、いずれも切っても切れない関係である。属格でマークされる名詞は、受身文において受影者や文のテーマになりやすく、主語に昇格されやすいが、属格でマークされる名詞が主語に昇格された以上、属格で修飾される名詞は、受影者や文のテーマにならず、主語にも昇格されず、ただ昇格された主語の内容を詳細に述べるだけにとめることになる。

例えば、「博士の鞆を奪った。」から「博士 (NP<sub>1</sub>) は 鞆 (NP<sub>2</sub>) を奪われた。」のような受身文が容易に作成できるのに対し、「鞆の博士を奪った。」からは「×鞆は博士を奪われた。」のような受身文が作成できないのもそのためであろう。

さて、影山 (2006) は、受身文を「出来事受影受身文」と「行為受影受身文」に分けた上で、典型的な無情物<sup>11</sup>主語受身文を「状態変化受身」「所有変化受身」「性質変化受身」「状態性受身」のように4分類している。この4種類の受身文にはいずれも目的語残存受身文の使用が確認される。次の用例に示されているように、主語に立つものは必ずしも受影者ではないものも観察される。例えば、

- (23) 基準を満たしたバナナだけが(検査官に)シールを貼られ、さらに細心の注意をもらって輸送、日本に届きます。(状態変化受身・影山)
  - (24) 卒業生が校長先生から卒業証書を手渡された。(所有変化受身・影山)
  - (25) 森はほぼ全体を深い霧(に/で)包まれた。(性質変化受身・影山)
  - (26) その物質はほとんどの部分を水素と酸素で構成されている。(状態性受身・影山)
- (23)~(26)のうち、(23)の主語は、存在場所や着点を表すものであるが、(24)の主語は、所有者

を表すものである。特に、注目したいのは、用例(25)と(26)のように、「性質変化受身」と「状態性受身」において、目的語が残存する場合、「深い霧（に／で）」や「水素と酸素で」のような成分が必須項になり、それらの成分の共起がなければ、文が成り立たないことになるということである。つまり、あることをテーマに取り立てて述べる際に、そのテーマに関わる必要不可欠の情報が求められ、それらの情報は残存の目的語が表す情報と共に述部を形成するのである。

用例(23) (25) (26)は、いずれも無情物主語受身文であるが、「バナナ」と「シール」、「森」と「全体」、「その物質」と「ほとんどの部分」とがやはり意味的につながっている。用例(13)の「新人の作品」と「その素直さ」との関係も同様であろう。有情物主語の目的語残存受身文においてその主語が受影者や文のテーマを意味するものであるとすれば、無情物主語の目的語残存受身文においてその主語は、受影者を意味するものではなく、文のテーマを意味することになるであろう。

従って、日本語のI型目的語残存受身文において、受影者や文のテーマをより明確に取り立てるために、受影者主語やテーマ主語になりやすい能動文の目的語名詞句内の属格名詞だけを主語に昇格させる。しかし、その属格名詞と同時に、目的語も主語に昇格することは難しいため、目的語が目的語の位置に残存して脇役のまま受影者主語やテーマ主語についてその内容を詳細に述べる役割を果たすことになると考えられる。

一方、中国語のI型目的語残存受身文でも、日本語のように、主語を受影者として解釈してもよい用例もある。例えば、用例(16)“一个美国青年被打丁屁股”における“一个美国青年”や、用例(17)“方孝孺被明成祖砍了头”における“方孝孺”は、受影者と解されよう。しかし、それは、同時に文のテーマとして解釈することもできる。

さて、次の用例を見てみよう。

(27) 他……被 一个 叫 白蓮花晏風 的 砍下 他 的 脑袋。(白眉大俠)

かれ 受身 一人 呼ぶ 白蓮花晏風 の 切り落とす かれ の 頭

かれは白蓮花晏風という人にかれの頭を切り落とされた。

(28) 刘世奇……被 徐良 抄 了 他 的 店房。(白眉大俠)

劉世奇 受身 徐良 家宅捜査をする た かれ の 宿泊先の部屋

劉世奇は徐良にかれの宿泊先の部屋を捜査され、差し押さえられた。

用例(27)では、能動文で属格表示された名詞の“他／かれ”は、受身文の主語に昇格されたにもかかわらず、受身文の目的語の属格としても同時に残っている。用例(28)では、能動文で属格表示を受ける名詞に当たる“刘世奇／劉世奇”は、受身文の主語に昇格しているにもかかわらず、受身文の目的語に、“刘世奇／劉世奇”を意味する“他／かれ”が属格名詞として同時に生起している。この用法は日本語では確認されていない。通常なら、能動文の目的語名詞句内の属格名詞は、主語に昇格された以上、受身文において再度目的語の属格として目的語とともに目的語の位置に残存することにならないからである。

つまり、中国語の受身文の主語は、受影者を取り立てるよりは、文のテーマとして機能するのが最も重要な役割であると言える。テーマ性を有するものなら、日本語ほど厳しい制約がなく、容易に主語に昇格できるのである。例えば、用例(27)と(28)は、次のように能動文の「属格表示された名詞＋修飾される名詞」の目的語名詞句が受身文の主語に昇格することもあり得る。

(29) 他的脑袋被一个叫白莲花晏风的砍下。／\*かれの頭は白蓮花晏風という人に切り落とされた。

(30) 刘世奇的店房被徐良抄了。／劉世奇の部屋は徐良に捜査され、差し押さえられた。

しかし、(29)と(30)の用法は、日本語ではなかなか観察されない。これは、日本語のI型目的語残存受身文において、受影者または文のテーマになり得るのが能動文の目的語の属格の成分だけであって、目的語の成分ではないという統語的制約があるからである。

(31) 私は、足を踏まれた。

(32) ×私の足は踏まれた。

において、「私の足」が踏まれたにもかかわらず、昇格できるのは、属格の「私」だけであって、「私の足」ではない。つまり、中国語の受身文においては、受影者主語よりはテーマ主語の方がより重要視されるのに対し、日本語の受身文においては、受影者が存在する場合、まず受影者が重要視されることになるからであると考えられる。従って、特別な文脈の指示がない限り、普通、日本語では(33)と(34)の表現も非文になるか、不自然な文になる<sup>12</sup>。

(33) ×私の鞆は盗まれた。／私は鞆を盗まれた。

(34) ×私の頭は殴られた。／私は頭を殴られた。

### 3.1.3 「NPはNPをVれる／られる」構文と「NPはNPがVれる／られる」構文

通常なら能動文の目的語が受身文において主語に昇格されることになっていることから、受身文には、目的語残存受身文と同時に、「NPはNPがVれる／られる」という構文もあってもよさそうである。例えば、

(35) ところが、開票の結果は予想がうらぎられた。民主党のトルーマン大統領が再選した。(Y・新しい潮・宮本百合子)

(36) 源氏の車は簾がおろされていた。(Y・源氏物語関屋・紫式部・與謝野晶子訳)

(37) 出口の雨戸は嚴重にかぎがかけられたままでしたから、(Y・右門捕物帖毒色のくちびる・佐々木味津三)

しかし、『青空文庫』2006年12月17日までの4,902作品を対象に調べた結果、「NPはNPがVれる／られる」の用例はなかなか容易には見つからない。限られた用例を観察する限り、用例(36)と(37)のように、主語が場所を表すもの、つまり「(場所としての) NP<sub>1</sub> (その場所の存在物としての) NP<sub>2</sub>を」のような構文が大多数である。この構文は、存在文

の「NP<sub>1</sub>に(は)+NP<sub>2</sub>がV(他動詞)れている／られている」の異形態であろう<sup>13</sup>。能動文の目的語の属格と目的語の両方が主語に昇格されるのは存在文の構文的制約によるものと考えられる。

## 3.2 二項動詞におけるII型目的語残存受身文

### 3.2.1 コロケーションの制約や構文的制約と目的語残存の条件

さて、二項動詞の目的語残存受身文には、主語と目的語との間に「NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>」の関係を持たない用法も存在する。そのような受身文は、本稿でII型目的語残存受身文と呼ばれるものに相当する。例えば、

- (38) 私は最新流行の服を恵子に先に着られてしまった。

≠私の最新流行の服

- (39) 父親は子供に悪魔教を信仰された。

≠父親の悪魔教

- (40) 私は妻に変なペンダントを着けられて驚いた。

≠私の変なペンダント

- (41) (私たちは)ほかの出版社に先に同じような内容の辞書を作られた。

≠(私たちの)辞書

(以上の用例はいずれも『日本語基本動詞用法辞典』より)

- (42) この可愛い娘さんは、メロスの裸体を、皆に見られるのが、たまらなく口惜しいのだ。(Y・走れメロス・太宰治)

≠可愛い娘さんのメロスの裸体

このII型目的語残存受身文は、主語の「NP<sub>1</sub>」と目的語の「NP<sub>2</sub>」がいずれも能動文の「NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>(を)」に還元できないものばかりである。つまり、I型目的語残存受身文と異なり、II型目的語残存受身文は、主語にたつものが能動文の目的語名詞句内の属格名詞から昇格されてきたものではなく、付加されたものである。この付加された主語は、能動文の目的語名詞句内の属格名詞でないことから、I型目的語残存受身文のような目的語とのつながりは存在しない。

一方、中国語のII型目的語残存受身文には、次のような特徴が見られる。

- ①「場所を表すNP+被(+動作主)+V(+補語)+目的語」といった構文の用例が多い。

例えば、

- (43) 梁霄心里(場所)突然象被压了一块石头。(北京大学CCL)

≠梁霄心里的一块石头／梁霄の心の石

- (44) 打扑克牌也常常是 脸上(場所)被贴满了纸条 (北京大学CCL)

≠脸上的纸条／顔の紙

- ②コロケーションの用法が多い。例えば、

(45) 有时睡梦中也惊悸地边哭边叫：“我要被炒鱿鱼了！”（北京大学CCL）

≠我的鱿鱼／私のイカ

(46) 船上的乘客被洗劫一空，刘老板也被绑了票。（北京大学CCL）

≠刘老板的票／劉社長の人質

とりわけ、①の目的語残受身文は、中国語では非常に発達し、生産性も高い。主語にたつものは、②と異なり、有情物よりは無情物の方が多い。例えば、

(47) 原来的房子已经被贴了封条。（北京大学CCL）

(48) 木制品被上了蜡。（HP）

用例(43)(44)と(47)(48)の用法は、中国語の“存現句（存現文）”に通底している。例えば、

(49) a. 我被套上了一个黑色的头罩。（北京大学CCL）

b. 机枪套上了保暖的枪套、车辆和火炮涂上了防冻润滑油。（北京大学CCL）

(50) a. 玛丽·卡森的脸上被投上了一层排红色的半透明的阴影。（北京大学CCL）

b. 从此，他的心灵深处投上了一道难以抹去的阴影。（北京大学CCL）

(51) a. 这些被绑架、被欺骗去的华工被烙上贩卖目的地的字号。（北京大学CCL）

b. 他的每一幅作品都深深烙上了他自己的心迹。（北京大学CCL）

(49)～(51)において、a. がいずれも目的語残受身文であるのに対し、b. はいずれも受身部のマーカの“被”の共起を求めない「存現文」である。a. と b. との間には特に意味的な相違が見られるわけではない。中国語の存現文は、受身を含意するものでも、目的語が必ず目的語の位置に生起することになっている。

つまり、中国語のⅡ型目的語残受身文において、目的語と動詞がコロケーションの場合は主語にたつものが場所を表し、「存現文」としても捉えられる場合は目的語が残存されやすいのである。

### 3.2.2 受影者主語とテーマ主語

上掲の(38)～(42)では、主語と目的語の間に「所有と所属」、「全体と部分」、「親族」といったような意味関係はいずれも見られない。しかし、主語と「目的語を+VP」とが全く無関係なものでないことも容易に読み取れるであろう。すなわち、主語はいずれも「目的語を+VP」から迷惑や被害などのようなマイナスの影響を受ける受影者であることができるのである。従って、主語を付加させる目的は、ほかでもなく受影者を取り立てるためであると考えられるであろう。

Ⅱ型目的語残受身文の特徴として、主語が殆ど有情物からなることが挙げられるが、無情物の主語の用例がないわけではない。例えば、

(52) しかるに、成長率は四十年度は低下する、企業利潤は著しく低下を予想される。

（Y・第48回国会予算委員会第5号）

(53) 中央及び地方を通じまして、日本全体の財政がその均衡を保持されること等に直接

重大な関係を持っておるものと考えておるのでございます。(Y・第9回国会予算委員会第6号)

用例(52)の「企業利潤」と用例(53)の「日本全体の財政」は、それぞれ「低下を予想される」と「その均衡を保持される」から何らかの(マイナスの)影響を受けることがなく、文のテーマであると解されよう。

要するに、日本語のⅡ型目的語残存受身文において、Ⅰ型目的語残存受身文と同様、主語にたつものが有情物が無情物かが非常に重要な要素である。主語にたつものが有情物なら、その主語は受影者と文のテーマの両方を表すことができるのに対し、主語にたつものが無情物なら、その主語は受影者ではなく、文のテーマを表すことになるのである。

さて、中国語のⅡ型目的語残存受身文において、主語にたつものは、日本語と同様、能動文の目的語名詞句内の属格名詞から昇格されるものではなく、付加されるものである。主語にたつものは、有情物と無情物を問わず、「VP+目的語(中国語の語順)」の受影者と解するものもあれば、「VP+目的語」から影響を受けず、文のテーマと解するものもある。つまり、有情物主語と無情物主語は、日本語のように受影者主語か文のテーマ主語に分ける重要な要素ではない。これを踏まえて考えると、中国語のⅡ型目的語残存受身文は、Ⅰ型目的語残存受身文と同様、受影者を取り立てるためではなく、文のテーマを取り立てるために、目的語が残存されることができるとすることができる。例えば、

- (54) a. 大约1500名婴儿被注射了麻疹疫苗。(北京大学CCL) / およそ1,500名の赤ちゃんは、はしかワクチンの予防接種を施された(予防接種をうけた)。  
b. 医院给大约1500名婴儿注射了麻疹疫苗。 / 病院はおよそ1,500名の赤ちゃんにはしかワクチン予防接種を施した。

用例(54) a. は、目的語残存受身文であるが、b. は普通の能動文である。両者は同じことを言っているが、文のテーマは異なる。a. においては、文のテーマが“大约1500名婴儿 / およそ1,500名の赤ちゃん”であるのに対し、b. においては、“大约1500名婴儿”が文のテーマから退けられ、ほかのものが文のテーマになっている。要するに、中国語のⅡ型目的語残存受身文において、文のテーマについて詳細に述べるのが求められる場合、目的語が共起できるとすれば、その目的語は残存することになるのである。

#### 4. まとめ

以上の検討によって、明らかになったことは次の通りである。

- ①目的語残存受身文には、Ⅰ型目的語残存受身文とⅡ型目的語残存受身文といった主語と目的語の意味関係がかなり異なった2種類のものがある。
- ②目的語が残存するか否かは、まず統語的制約を受ける。目的語と動詞がコロケーションである場合、また構文上の制約がある場合、目的語は残存しやすい。

- ③日本語の目的語残存受身文は、Ⅰ型とⅡ型を問わず、受影者を主語に取り立てることが特徴的である。中国語の目的語残存受身文は、Ⅰ型とⅡ型を問わず、文のテーマを主語に取り立てることが特徴的である。
- ④日本語の目的語残存受身文にテーマ主語がないわけではなく、中国語の目的語残存受身文に受影者主語がないわけでもない。主語が有情物なら受影者主語になりやすいが、主語が無情物ならテーマ主語になりやすいことは日本語も中国語も同様である。有情物主語なら必ずといっていいほど受影者主語になる日本語と異なり、中国語は有情物主語であっても、必ずしもそのすべてが受影者を表すものではなく、テーマ主語を表すものがある。
- ⑤受影者主語はテーマ主語のカテゴリーとして考えることができるので、テーマ主語はスキーマであると言える。受身文において、動詞が他動詞であり、(受影者を含む)文のテーマを主語に取り立てなければならない場合は、能動文の目的語が残存することになる。

以上、二項動詞を中心に考察してきたが、結論の可否を検証するために、三項動詞の目的語残存受身文も考察しなければならない。それは今後の課題としたい。

## 注

- 1 「能動文」に対して、普通なら「受動文」を使うことになるが、「受身文」という術語はかなり定着していることを踏まえ、本稿では「受身文」を使って表現する。
- 2 ここでいう「目的語」は、名詞的修飾成分を伴わない裸の「目的語」のことを意味するものである。
- 3 この主語は、統語論的レベルでは主語、語用論的レベルでは主題を意味する。
- 4 「私はおじさんに読書のおもしろさを教えられた。←おじさんが私に読書のおもしろさを教えた。『現代日本語文法2』(2009、くろしお出版、p.221)」のように、能動文の「に格名詞」が主語に昇格される場合もある。詳細は山内(1997)を参照されたい。
- 5 日本語の用例は基本的に『YUKANGコーパスVer.14』(于康、2012)から採取したものである。このコーパスには主に次のものが含まれている。『新潮文庫明治の文豪』、『新潮文庫大正の文豪』、『新潮文庫の絶版100冊』、『新潮文庫の100冊』、『新潮文庫の絶版100冊』、青空文庫2006.12までの作品、『毎日新聞』1995年と2005年、現代小説121冊、ネット小説の上位のもの、国会会議録衆議院予算委員会第1回から第177回までの記録。ここに新潮出版、青空文庫、毎日新聞社、関係出版社、ネット小説ランキングの主宰者、国立国会図書館に心から御礼を申し上げたい。なお、このコーパスは研究用に限定しており、公開していなければ、配布もしていない。以下、「Y・作品名・著者名」で記す。出典がない場合は作例である。
- 6 日本語訳は著者于康が訳したものである。中国語の文を理解してもらうために、直訳の場合もあれば、日本語として成り立たない場合もあることをお断りしておく。

- 7 主な先行研究には、丁声树（1961）、吕叔湘（1965）、李临定（1980、1986）、李珊（1990）、徐杰（1999、2006）、陆俭明（2006）、严玉培（2006）、邓思颖（2006）、潘海华（2008）等がある。
- 8 仁田（1992）は、「太郎はスリに財布をすられた。≠太郎はスリにすられた。」「僕は模型飛行機を弟に壊されてしまった。≠僕は弟に壊されてしまった。」「私は警官に息子を殴られた。≠私は警官に殴られた。」の用法を、「第三者の受身」としている。「持ち主の受身」の各カテゴリーの用例は次の通りである。「憲二は頭を広志に殴られた。（接触場所の持ち主）」「伴子は自分がいつの間にか左衛子に強く心を、惹附けられてゐるのを感じてゐた。（部分・側面の持ち主）」「～。だから、昨日戻ったところを殺された、ということになりますかね。（状況のヲ格を持つ）」。用例はいずれも仁田1992より引用。
- 9 詳細は奥津敬一郎（1983）を参照されたい。
- 10 「北京大学CCL」は、北京大学中文系、北京大学計算語言所、全国語言文字標準化技術委員会語法篇篇分技術委員会、北京大学中国語言学研究中心がウェブ上で公開している中国一の大規模中国語コーパスである。
- 11 影山（2006：203）は次のように指摘している。『『典型的に非情物』というのは、要するに動詞の意味的な選択制限に還元される性質であり、動詞によっては生き物でもよいこともある。』
- 12 ただし、属格が存在しない場合は、目的語が主語に昇格されやすくなる。例えば、「鞆は盗まれた。」「頭は殴られた。」など。
- 13 詳細は于康（2007）を参照されたい。

## 参考文献

- 于康 2007 日本語の存在構文とその存在構文からみた動詞意味と構文意味のかかわり。『国文学叢』192・193合併号、pp. 1-13、広島大学国語国文学会
- 于康 2009 日汉所有关系被动句与所有物共现的语义条件。对外经济贸易大学《日语学习与研究》第4期
- 奥津敬一郎 1983 不可分離所有と所有者移動。東京都立大学国語国文学会『都大論究』第20号（奥津敬一郎 2007 『連体即連用？日本語の基本構造と諸相』に再録、ひつじ書房）
- 影山太郎 2006 日本語受身文の統語構造 — モジュール形態論からのアプローチ。『レキシコンフォーラム』No. 2、ひつじ書房
- 金水敏 1993 受動文の固有・非固有性について。『近代語研究』第9集、武蔵野書院
- 工藤真由美 1990 現代日本語の受動文。言語学研究会『ことばの科学』4、むぎ書房
- 徐杰 1999 两种保留宾语句式及相关句法理论问题。当代语言学。第1期：16-29
- 徐杰 2006 被动句与非宾格句式的一致与差异。邢福义主编。汉语被动表述问题研究新拓展。华中师范大学出版社：409-422
- 鈴木重幸 1972 『日本語文法・形態論』麦書房
- 丁意祥 1995 いわゆる〈持ち主の受身〉について — 非分離性関係の受身について。現代日本語研究。第2号。大阪大学大学院文学研究科日本語学講座：103-120

- 邓思颖 2006 汉语被动句的三个句法问题. 邢福义主编, 汉语被动表述问题研究新拓展. 华中师范大学出版社: 92-99
- 寺村秀夫 1982 『日本語のシンタクスと意味第1巻』くろしお出版
- 西山佑司 2003 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房
- 仁田義雄 1992 持ち主の受身をめぐって. 『藤森ことば論集』清文堂出版
- 仁田義雄 2002 『辞書には書かれていないことばの話 もっと知りたい! 日本語』岩波書店
- 野田尚史 1991 日本語の受動化と使役化の対称性. 筑波大学大学院人文社会科学研究所『文藝言語研究. 言語篇』19
- 潘海华·韩景泉 2008 汉语保留宾语结构的句法生成机制. 中国语文. 第6期: 511-576
- 益岡隆志 1987 『命題の文法—日本語文法序説』くろしお出版
- 益岡隆志 1991 受動表現と主観性. 仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 益岡隆志 2000 第5章 叙述の類型から見た受動文. 益岡隆志『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 松下大三郎 1930 a 『標準日本口語法』中文館書店
- 松下大三郎 1930 b 『改撰標準日本文法』中文館書店
- 三上章 1953 『現代語法序説シンタクスの試み』刀江書院(復刊 くろしお出版1972)
- 村木新次郎 1991 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 森田良行 1995 『日本語の視点~ことばを創る日本人の発想』創拓社
- 森田良行 2002 『日本語文法の発想』ひつじ書房
- 山内博之 1997 日本語の受身文における「持ち主の受け身」の位置づけについて. 日本語教育学会『日本語教育』92号
- 李临定 1980 “被”字句. 中国语文. 第6期: 401-412
- 林璋 2010 中日両言語における動作主主語受動文. 『日中言語研究と日本語教育』第3号. 好文出版
- 陆俭明 2006 有关被动句的几个问题. 邢福义主编, 汉语被动表述问题研究新拓展. 华中师范大学出版社: 217-229
- 吕叔湘 1965 “被”字句“把”字句动词带宾语. 中国语文. 第4期. 吕叔湘. 1999. 《汉语语法论文集》增订本. 商务印书馆: 200-208

—う・こう、関西学院大学国際学部教授—